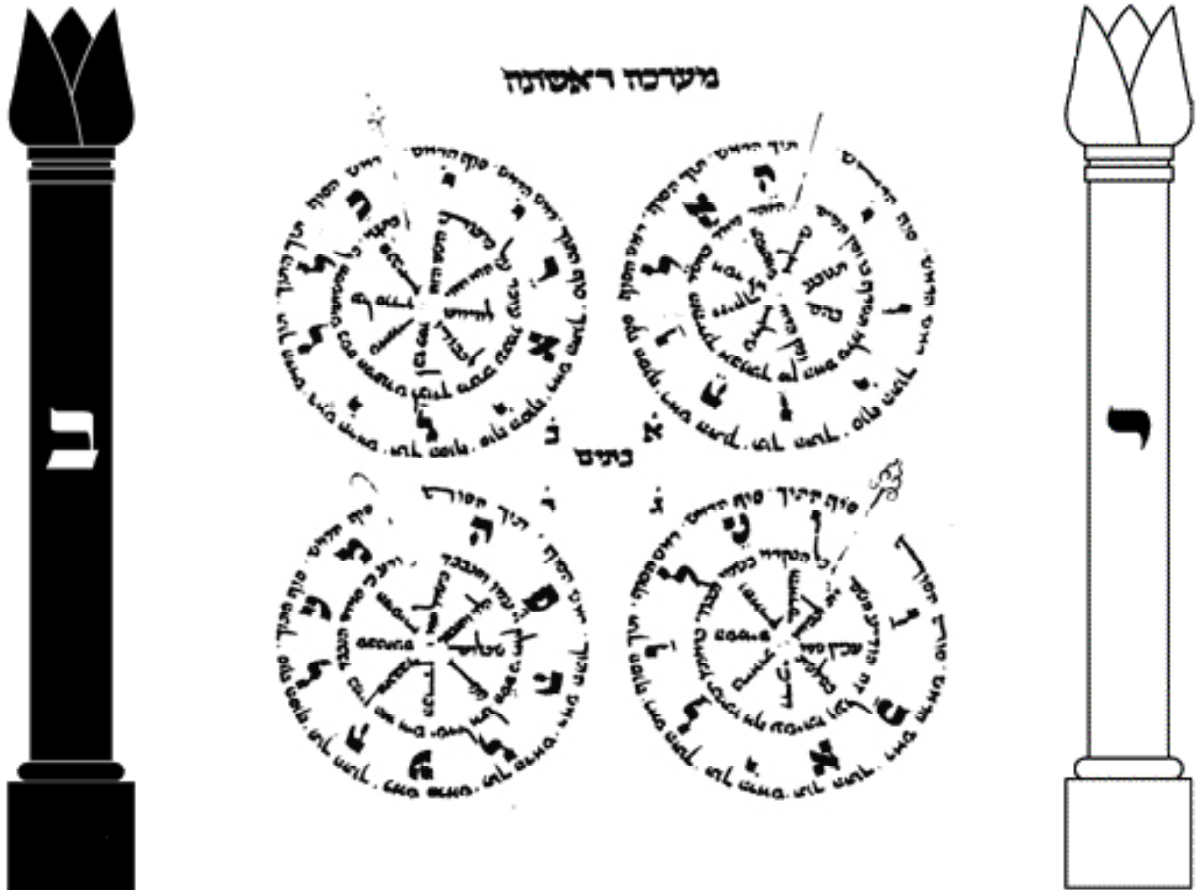


春 分 儀 式

I :: O :: S :: 儀式魔術文書 VE10A



THE OFFICIAL ORGAN
OF

I::O::S::

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I::O::S::

THE VERNAL EQUINOX CEREMONY FOR ASTRAL WORKING
I::O::S:: ASTRAL TEMPLE WORKING

第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が、簡易な準備で行える霊的集合儀式(Astral Temple Working)として作成した。従って、実行儀式よりも簡略化した部分がある。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は、原則的に春分点の前後48時間以内に実施すること。2010年の春分点通過は3月21日(金)午前2時32分(日本標準時)である。儀式内容は、恍惚の魔術の公式を利用して春分の祝祭を実施する。

1 恍惚の魔術

(1) アブラハム・アブラフィアの略歴

13世紀の卓越した神秘化、カバリストであるアブラハム・ベン・サミュエル・アブラフィアは、恍惚のカバラ(イデルの命名)、預言者のカバラ(ショーレムの命名)、または、その方法論から文字のカバラとも言うべきジャンルを確立した。自らセフィロトのカバラは初歩的なカバラであると断じ、壮大な文字のカバラの迷宮を構築し、懇切に弟子を教育した。⁽¹⁾



かれは1240年にスペインのサラゴサで生まれた。18歳で父親が死亡してから、トレドに移り住み、失われた十支族を探すためにパレスティナに向かうが、キリスト教国軍とイスラム教国軍との戦争に阻まれ、旅を断念する。この東方への旅において、スーフィズムなどの神秘思想に触れた可能性を指摘する者もいる。⁽²⁾ この後にアブラフィアが発展させた恍惚のカバラには、確かにスーフィズムとの類縁性が高い。恍惚とは深い神人合一のさなかに得られるものだが、アブラフィアの弟子のひとり、処刑されたスーフィーの賢者のように「われはかれなり」(神の視座)と宣言する。⁽³⁾

アブラフィアは、イタリアに引き返し、マイモニデスの『迷える者への指針』を体系的に学び始める。1270年頃にはスペインのバルセロナに戻り、バルク・トガルミの注釈書を手がかりに『セフェル・イエツィラー』を集中的に研究する。

バルセロナ在住の31歳のときに、預言者としての「招命」を受ける。⁽⁴⁾

1280年には、反ユダヤ的なローマ教皇に宗論を挑みに行く。憤激した教皇ニコラウスⅢ世は、火刑にする準備をして待つが、ローマ郊外でアブラフィアが瞑想をしている間に急死する。予定通りローマに入ったアブラフィアは投獄されたが、28日後に釈放された。

ローマを離れたアブラフィアは、旧守派のラビたちの迫害を逃れ、シチリア島に逃れ、さらにマルタ島に身を隠す、その後の足跡は曖昧だが伝承では1291年に没したとされる。

(2) 文字のカバラ

アブラフィアは、ツェルフと呼ばれる瞑想の技法体系を確立した。

かれは真の名前の発音は、人間と神との対話であると考えていた。文字を組み合わせて発音するとき、神の応答が得られる。それは天啓のように聞こえることもあれば、術者自身の唇を用いて発音されることもあった。「(主は)いかなる地においても、わが名が発音されるとき、汝を訪ない抱擁するであろう。」とも語った。

実践の技術として、興味深いことにも触れている。

(1) Moshe Idel, *Studies in Ecstatic Kabbalah*, New York : State University of New York Press, 1988, pp.139f.

(2) Greshom Scholem, *Kabbalah*, New York : Meridian Books, 1978, p.54. Idel, op. cit., pp.106f.

(3) Idel, op. cit., pp.10f.

(4) Scholem, op. cit., p.54.

「汝の顔を文字へ直接に向けよ。文字が語られるとき、あたかも汝の前に人が立っており、話かけられるのを待っているように、汝が語るとき、かれが答える。・・・
発音を終えて休息するとき、対面している人物が答えたかのように、声を変えながら、汝自身が答えよ。そうすれば、応答は質問のように聞こえない。」

術者と神とが対話するように、相互に文字が発音される。しかし、実際に声を変えて神の応答を演じるのは術者である。この二重性は何の矛盾もなく受け入れねばならない。⁽⁵⁾

文字のカバラに使用した神聖名はさまざまである。聖四文字だけでも、I H V Hをテムラーの技法（アトバシュ）で、MT z P T zに変換したり、⁽⁶⁾ Y H V Aとしてゲマトリアで同数値のV B I D（ユーベーヤド）に変換したり、⁽⁷⁾ 多々試みている。

そして、組み合わせ、変換するだけではなく、名前を構成する部分も名前であることを、先人の教えから認めている。ラビ・アキバの文献に「名前の文字に関して、名前も、その部分も名前である。ヨドは名前である。ヨド・ヘーは名前である。ヨド・ヘー・ヴァウは名前である。ヨドがそれ自体で名前であることは、名前と、その名前の各文字が名前であることを教えている。」とある。⁽⁸⁾

(3) 母音の門

アブラフィアが『知性の光（オール・ハ・シュケル）』に示した文字と母音とを組合せる方法は、次のように整理される。⁽⁹⁾ 母音を使用した文字のカバラは、アブラフィア以前にもあった。ウォルムスのエレアザルなどが有名である。文字アレフを聖四文字の各文字と組み合わせるところまで同じであるが、エレアザルは6つの母音を使用したのに対して、アブラフィアは5つの母音を使用した。⁽¹⁰⁾ 同書には、次のように書かれている。⁽¹¹⁾

「準備段階として、綺麗な衣装をつけ、その上に白の法衣をまとう。静かに東を向いて座る。東は光が世界を照らす方向だからだ。ホレムを発声するときは、東面して正確に東を見る。視線、つまり頭部の方向は上向きでも、下向きでもなく水平に保つ。思念を清浄に保ち、息を吐き始めるとともに、少しづつ頭を上げ始める。息を吐き終わるとき、頭は完全に上を向く。文字アレフと対になった文字を発音する間、頭部は静止していること。そして、その間にひとつの長い呼吸を行っても良い。

文字と文字の間では、最大2回まで呼吸できる。2回以下でも良い。発音が終わると、最大5回まで呼吸できる。5回以下でも良い。発音の最中に間違えたら最初からやり直しなさい。次にヒリクを発音するときは、頭を下げなさい。その間に、天界の力が引き下ろされ、あなたと結びつけられる。シュレクを発音するときは、頭部を上下させず、前方に動かしなさい。そのとき、上にも下にも傾けないようにしなさい。ツェレを発音するときは、頭部を左から右に動かしなさい。カメッツを発音するときは、頭部を右から左に動かしなさい。」

しかし、これでは理解し辛いので、下表に実際に動かす順序に発音記号を並べた。ヒリクのみ短母音で、他は長母音だが、儀式上の発音ではいずれも伸ばして使用する所以で差異はない。

(5) Moshe Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, New York : State University of New York Press, 1988, pp.86-88.

(6) Elliot R. Wolfson, *Abraham Aboulafia Cabaliste et Prophete*, Paris : Edition de L'Éclat, 1999, p.161.

(7) Elliot R. Wolfson, *Language, Eros, Being : Kabbalistic Hermeneutics and Poetic Imagination*, New York : Fordham University Press, 2005, pp.238f.

(8) Moshe idel, *Language, Torah, and Hermeneutics in Abraham Abulafia*, New York : State University of New York Press, 1989, p.120.

(9) Aryeh Kaplan, *Meditation and Kabbalah*, York Beach : Samuel Weiser, 1982, pp.88-92.

(10) Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, p.23.

(11) *Abraham Abulafia : A Meditation on the Divine Name from "light of Intellect" Messina 1285*, Translated by Avi Solomon, Philadelphia, 2010, small booklet.

発音記号	母音	発音	方位	頭部の運動
ホレム	o	オオー	上	正面から真上を向く、戻す。
カメツ	a	アアー	北	正面から左を向く、戻す。
ツェレ	e	エエー	南	正面から右を向く、戻す。
ヒリク	i	イイー	下	正面から真下を向く、戻す。
シュレク	u	ウー	東西	頭部を前に突き出す、後ろに押し出し、戻す。

さらに、アレフとヨドの文字の組み合わせで一例を示すと、下表の呼吸と発音の組み合わせとなる。真中の「Ao I e」はアレフ（発音記号ホレム）ヨド（発音記号ツェレ）を意味する。



長 1 呼吸	2 呼吸	長 1 呼吸	2 呼吸	長 1 呼吸	2 呼吸	長 1 呼吸	2 呼吸	長 1 呼吸
Ao I o		Ao I a		Ao I e		Ao I i		Ao I u
沈黙の 5 呼吸								

上表には、アレフ（発音記号カメツ）とヨド（5 記号分）の行が続き、アレフ・ヨドの行が累計 5 行、さらにヨド・アレフの行が 5 行で、各 5 行 5 列の 2 枚のアレフ／ヨドの表が完成する。

原典である『知性の光』の冒頭には、右に示した表が掲載されていた。

アブラフィアのアレフと聖 4 文字の発音は、上記の表が 4 種類計 8 枚で構成されている。

かなり頻繁に頭部を動かすことになる。上の図ではアレフ・ヨドの発音毎にひとつの動きをすると誤解されそうだが、長い一呼吸の間に、アレフ（Ao）で頭部を上げ、戻し、ヨド（Io）で上げ、戻し、2 呼吸分静止したあと、アレフ（Ao）で頭部を上げ、戻し、ヨド（Ia）で左に向け、戻し、・・・という動作を続けるのである。一枚の表で 50 回頭部を動かしている。

文字の発音は、頭部の運動のあとに行うとする解説書もあるが、ここでは『知性の光』の記述に従い、同時に行うものとする。

今回、使用するのは、上記の応用であり、聖四文字に 5 母音を使用した「王の臨在」という光の集積法である。⁽¹²⁾『知性の光』に示された 5 母音の頭部の運動を併用し、宇宙の 6 方位である上下東西南北（シュレクの運動が東西（前後））に王の臨在を祝福する。アブラフィアは『セフェル・イエツィラー』の注釈書を書いており、主が宇宙を創造したときは、この 6 方位を開いたとされる。

さて、聖四文字を普通に発音すれば、ヨド・ヘー・ヴァウ・ヘーになる。

しかし、この発音は子音を読んだだけであり、発音記号の規定する母音を無視している。

(12) パール・エプスタイン『カバラの世界』青土社、1995年、141頁。

かつて、聖四文字は母音だけで構成されとする主張があった。I H V Hをイー・アー・オー・アーと読むものだ。子音と結合を図ると、イー・ヤー・ウー・ワーとか、イー・ヤー・フー・ワーとなる。イーヤーフーワーとはヨム・キプール祭で唱えられる言葉である。⁽¹³⁾
アブラフィアのやり方で母音を追加すれば、下表ようになる。⁽¹⁴⁾

発音記号		ヨド	ヘー	ヴァウ	ヘー
ホレム	O	ヨオー	ホオー	ヴォー	ホオー
カメツツ	A	ヤアー	ハアー	ヴァー	ハアー
ツェレ	E	イエー	ヘー	ヴェー	ヘー
ヒリク	I	イイー	ヒイー	ヴィー	ヒイー
シュレク	U	ユウー	ヒュー	ヴュー	ヒュー

(4) 感覚の遮断

ある無記名のカバリストはヒトボデドゥースの要点は目を閉じることだと述べた。⁽¹⁵⁾
室内を暗くして黎明視を求めるのも、ほぼ同等の行為であるが、感覚が遮断され、物理的な世界から隔離されることで、幻視が深まる。瞑想中は、目を閉じて、または、半眼となっていることが望ましい。むろん、所作を伴い、危険のある場合は異なる。

(5) 祭司の手

アブラフィアは、『セフェル ハ・ヘセク』において、手を動かす作法を論じた。⁽¹⁶⁾

「両目を天に向け、左手と右手を天に掲げよ。あたかも祭司がなすように、(10本の)指を分け、5本を一方に、5本を他方に向けよ。左手の2本と、右手の2本(つまり、両手の)の小指(ケミザー)と薬指(ツェレト)をひとつにし、反対側の2本もひとつにする。両者を分け、親指は立てたままとする。・・・そして、神のもとにあげていた両手をただちにおろし、10のセフィロトを思いつつ、5つのセフィロトが5つのセフィロトの上にあるように、左手を心臓の上に置き、右手をその上に置く。」
両手の10本の指はセフィロトに照応し、開いた手はメノラーのかたちをしている。



(6) 恍惚の魔術

アブラフィアは、当時のユダヤの神秘家には許容できないほど極端な公開主義者だった。かれは神秘の秘奥を惜しげもなく公開した。それ故に同業者の根深い反発を生んだ。

かれは文字のカバラを丁寧に教えたが、それはあくまでも手段でしかない。その結果、生まれる神聖なる直接的知覚を重視した。そのためには香、音楽、視覚化技法、頭部の急速な運動、魔術的所作、天使のテレズマ的姿形等のありとあらゆる魔術的技法を駆使した。

そして、その結果求めたのは神聖なる恍惚、光を見て、自ら光となることであった。ここにアブラフィアの本意がある。

(13) Leonora Leet, *The Secret Doctrine of the Kabbalah*, Rochester : Inner Traditions International, 1999, pp.158f.

(14) Rabbi David Cooper, *Ecstatic Kabbalah*, Sound True, 2005, p.39.

(15) Idel, *Studies in Ecstatic KABBALAH*, p.134.

(16) Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, pp.29f.

2 司官の配置

(1) 司官の指定

本儀式に必要な司官は、PRAECEPTOR (P C)、すなわち「先導者」の1名である。

P Cは、黄金の夜明け団の伝統的な白の法衣を纏い。白のネミスをかぶり、マントやその他の役職記章はつけていない。右手に「ハイエロファントの棒」をもつ。それは神殿を開き、つなげる権威の象徴である。

他の参列者は、内陣団員は白の法衣と白のネミスを、外陣団員及びプロベিশヨナーは、黒の法衣と白黒縞のネミスをかぶり、手には何も待たず参集する。

ディオン・フォーチュンの内光協会のアストラル神殿儀式では、参集者は儀式場に座ったまま、光体（かれらはアストラル体と呼称）を下位アストラル神殿に投射する。そのとき光体は全裸であり、神殿の着衣の間 (Robing Room) において、光の法衣を纏う。

(2) トーラーの宰相の召喚

司官は、マルクト神殿で律法の公爵を召喚し、メタトロンの顕現たる大天使の長上が「肉の衣を去る」までは、実効上の神（天使を使役する者）として活動する。この場合「肉」とは、魔術師の「光体」のことである。

3 アストラル神殿の構造

マルクト神殿を使用する。

4 魔術の技法的側面

(1) 封印の受肉

起誓言などを多用するメルカバ神秘主義において、「封印 (□□□□)」は護符 (amulets) に記されて術者が携行するほか、術者の肉体に直接書き込まれる場合があった。⁽¹⁷⁾

マーヴィン・メイヤーらは、コプト語呪文の研究のなかで、ギリシャ語の聖なる七母音が神像の胸に入墨されている例を示した。⁽¹⁸⁾

バル・イランは、『マセー・メルカバ』の「七の封印」を例にとり、次のように述べた。「封印がどのように刻印されたか、さだかではない。祈禱する神秘家の四肢に封印が刻印され、神聖なる霊視を得るための不可分的手段となっている。」⁽¹⁹⁾

(2) 聖四文字の呼吸

聖四文字の呼吸においては、ペリマーが世界が流出を開始する以前の「無の性質」に直結し、マーが流出後の「有の性質」を表現する。

呼吸法において、「𐤌」を詠唱する際は、「ヨー・ヘー」と発声する。瞑想中は、呼吸する際に喉を空気が通る音ぐらいの高さで囁く。息を吐きつつヨーと詠唱し、息を吸いしつつヘーと詠唱する。その際は、心中にそれぞれの文字を視覚化する。⁽²⁰⁾

(17) Janowitz, *Icons of Power*, pp.79f.

(18) Marvin Meyer, *Ancient Christian Magic*, Princeton : Princeton University Press, 1999, pp.231, 280.

(19) Lesses, *Ritual Practices to Gain Power*, p.317f.

(20) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary*, Berkley: North Atlantic Books, 2003, p.30.

息を吸いながら発音するのは難しいが、無理に大きな声を出す必要はない。その音は術者の心のなかに響きわたれば良いのである。

今回は、すでに境界を跨いだアストラル・ライトのなかで、「無の性質」を象徴するヨド・ヘーの呼吸と「有の性質」を象徴するヴァウ・ヘーの呼吸を併用し、祭壇の上に「有と無の融合」を現出させる。

(3) 呪歌の力

本儀式においては呪歌を使用する。

ヘブル語においてシーラー $\aleph \aleph \aleph$ (複数形シーローズ $\aleph \aleph \aleph \aleph$) とはシャントを意味する言葉である。『申命記』第31章に説明されるとおり、折りに触れユダヤの民が歌うようにと定められた歌のことだ。

ラビ・シェファ・ゴールドによれば、シャントの恍惚体験は全き献身による観想的空間への移行を可能とする。観想的沈黙の文脈のなかにおいてシャントの力が深化し、発展するための空間が作り出される。シャントは『詩編』23章5に示された「溢れる盃」(コシ・ルバヤ $\aleph \aleph \aleph \aleph$) である。そして、あふれる盃には2種類があり、シャントを唱える者たちのなかに生成される。

第1の盃は、各人の心臓の上にある内的な盃であり、盃には生命と愛の源泉から途切れることのない流れが注ぎ込まれあふれ出ている。シャントは、その流れと自分自身を再結合する。

第2の盃は、シャントを唱える集団のなかに生成される。唱和するシャントの音と、注意力の共有が盃を生む。その盃には神聖な流れが注ぎ込んでおり、集団に属する誰でも盃からあふれる神聖な流れに触れることができる。⁽²¹⁾

(4) 呪符等の構成

ヘブル語の神聖名は、文字として書かれた場合でも声に出して歌うのと同等の効力を発する。しかし、シャントを正しく用いると特別な効果が生じるのは前出のとおりである。

『マナセの祈り』に曰く「神は深淵を閉じ、力強く誉れある自らの名で封印した」⁽²²⁾

呪符については、アブラフィアの文字のカバラから借用した。聖四文字の文字を分解して使われるシャント及びヘブル語の各文字を連唱するシャントは各所で用いられている。⁽²³⁾

(5) 黎明視

視覚情報の混乱による幻視「シャルル・ボネ諸侯群」⁽²⁴⁾、言語入力 of 混乱、呪文の反復(単純類似構音の連続による記憶操作⁽²⁵⁾)などを利用する。

5 身辺の準備

(1) 部屋の準備

部屋を暖かくし、プライバシーを保護できるような態勢づくりをする。(家族に部屋に入らないように断ってからドアの鍵を閉める等)、携帯電話、アラームの類はあらかじめ切ってお

(21) Rabbi Shefa Gold, "That This Song May Be a Witness : The Power of Chant", in *Meditation from the Heart of Judaism*, Woodstock : Jewish Lights Publishing, 1997, p.85.

(22) The Player of Manasseh, in *The Old Testament Pseudepigrapha*, New York : Doubleday, 1985, p.634.

(23) 一例として、Joseph Naveh & Shaul Shaked, *Amulets and Magic Bowls : Alamaic Incantations of Late Antiquity*, Jerusalem : The Magnes Press The Hebrew University, 1998, pp.44-49.

(24) <http://jiten.com/dicmi/docs/k12/17252s.htm>

(25) グザヴィエ・スロン 『認知神経心理学』 白水社、1995年、63、64頁。

く。部屋の中央に快適な椅子か、ソファを置き、その他の不要なものを片づける。

部屋を薄暗くする。小さな照明を利用する場合は、背後に置き、その光を直視しないように配置する。

何度も反復して練習し、象徴や、儀式の細部まで呑み込んでいても、外部の妨害ですべてが台無しになることもあり得る。準備は、怠りなく。

(2) シナリオ

今回も、シナリオ文書を単純化したので記憶してもらいたい。黎明視の妨げとなるので、テープの録音も不要である。

あなたの行動する部分は緑の文字で記してある。

神聖名を発音するときは、注意深く行うこと。

事前のリハーサルは勿論、必須とも言える。

(3) 直前の手順

開始する前に手を洗い（儀式的沐浴）、法衣（または身体を締め付けない服装）に着替え、LBRPを行って椅子に座り、中央の柱の行法で活性化する。

第2章 儀式

1 神殿への入場

この準備的作業は、光体のレベルではなく、生身の肉体で行う。

参加者は、東に面して座り、目をかすかに開き（いわゆる半眼の状態）にする。視線は足下に落とし、家具などの周囲の状況が明確に像を結ばないようにする。瞼を開く程度を変えて、この焦点を結ばない状態を維持する。気持ちが悪くなった場合は、普通に眼を開いて、もう一度調整する。

半眼のまま、深く呼吸をする。呼吸は肺だけではなく、全身の皮膚を通して行う。一息ごとに、喉や鼻孔のみならず、全身の皮膚から、周囲に満ちている生気が肉体に吸い込まれ、全身の細胞を活性化させる。

あなたは光のトンネルを通過して、アストラル神殿の外庭に着地し、扉の前に立つ。マルクト神殿のヤキンとボアズの柱を通過し、青銅の扉に面すると、扉の表面に刻まれたIOSの三文字が内側から光を発し、扉は音もなく両側に開く。

神殿の内陣広間に通じる廊室において、兄弟姉妹たちが集っている。

2 ウシャブティ

先頭に立ち、集まった参加者を振り返るPCが静かに命じる。「ウシャブティを纏うべし。」PCは、率先して「小神像（ウシャブティ）」を纏う。

すなわち頭頂の光球から光を拡散し、やわらかな膜のような形に引き延ばして、喉の光球に結びつけ、さらに胸と背を通して、胴の光球を振動させ、腰を振動させ、最後は足下の光球を振動させ、全身をひとつの巨大な光の膜で包み込んでしまう。その無定型のオーラの卵を好みの神、天使、神話の形態に変化させる。この場合は、司官は顔のないアケファロスの姿形をまとう。参加者は、文字通りエジプト神話の代理神像である直立した人間の姿をもつ霊的姿形を纏う。

PCは、廊室の中央の扉をくぐり、本殿に入る。

兄弟たちは、廊室でしばし準備のできるのを待つことになる。

3 物見の塔の儀式

PCは、祭壇の西側に回り込む。自らのオーラを広間全体に広げる。そして、拡張した白く輝くオーラを保持したまま、小五芒星の追儼儀式を行う。

引き続き、小六芒星の追儼儀式及び物見の塔の儀式を行う。

参加者は、その動きを廊室から、おぼろげな円運動による渦の発生として捉える。詳細なPCの動作を視覚化する必要はない。

4 入場及び宣言

PCは神殿の西の壁を背にして、東を向き合図の鈴を鳴らす。

PCの霊的な鈴の合図で、参加者の入場が始まる。

兄弟たちは右側、すなわち南の壁際に立ち、姉妹は左側、北の壁際に立つ。

PCは、内側を向いたまま次の言葉を宣言する。

PC：「I ∴ O ∴ S ∴ の兄弟姉妹たちよ。春分の儀式を開始せん。」

5 律法の宰相の召喚

PC：「七つの封印を光体に刻印せん。」

PCは聖なる名前を唱えたあと、剣指をつくり、揃えた両膝に当てる。

参加者もPCの動作に倣う。

PC：聖名とともに唱える。「アブリース ススティイー。わが脚を封じる。」

(אור"ם סס"י)

全員：「わが脚を封じる。」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。

PC：聖名とともに「アバグ バググ。わが心臓を封じる。」（אבגב בגבג）

全員：「わが心臓を封じる。」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。

PC：聖名とともに「アリム ティパー。わが右腕を封じる。」 (א'ר'ם א'ר'ם)

全員：「わが右腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。

PC：聖名とともに「アブリース セシー イアー。わが左腕を封じる。」

(אורים תסי' יאה)

全員：「わが左腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を首に当てる。

PC：聖名とともに「アビス セル バグ エル ヤーブ ドゥーエル。わが首を封じる。」

(אבית תל בג אר ייו דיו אל)

全員：「わが首を封じる。」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。

PC: 聖名とともに「アブ パク キテル スス エイカド ヤドヤド ヤー。わが生命とすべての部分を守護するために。」 (אֲבוּ פֶּאק קִיטֵר סֵס אֵיכָד יָדוּ יָדוּ יָאֵר)

全員：「わが生命とすべての部分を守護するために。」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。

PC：聖名とともに「オーブ パス ヤーウ キープ ヨー ザハブ ヤーウ ティティス。
わが天蓋を封じる。」 (אוֹף פֶּת יְהוּ חִיו יוֹ וְהוּ יְהוּ תִּיתִס)

全員：「わが天蓋を封じる。」

PCは封印の完成とトーラーの宰相への呼びかけを行う。

祭壇の傍らにいるPCの上に覆い被さるように出現する巨大な天使の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの顔のないオーラに、律法の宰相のテレズマの姿形が融合し、再形成されてPCの霊的外形が急激に変化する。

PCが宣言する。

PC：「われは、聖なる五つの文字に表象される無敵の一者なり。

四風を聖化するは、われなり。

五界を結ぶは、われなり。」

6 四風の聖化

P Cは東を向いて宣言する。

「I ∴ O ∴ S ∴ の神殿に四方位の風を召喚せん。」

神殿の東壁の中央に扉が現れた。

P Cは、東に向い高らかにヘブル語を詠唱する。それは、四方位の風をふるわせる呪歌である。

P C：「エロウイイー

('אֱלֹהִים わが力の根元よ。)

ネシャマー・シェー・ナタフター・ビー

('בְּיָדְךָ שְׁמַחַת הַיָּם וְשִׁמְחַת הַיָּבֵשׁ 汝が授けし息吹よ。) ⁽²⁶⁾

テホラー・ヒー

('טָהוֹרָה סוֹה 清浄なり。)

アター・バラター

(אַתָּה בְּרָא אַתָּה 汝がそを創造せり。)

アター・ヤツアルター

(אַתָּה יָצַר אַתָּה 汝がそを形成せり。)

アター・ネファクター・ビー

('נִפַּח אַתָּה 汝はそを我に吹き寄せる。)

ヴェ・アター・メシムラー・ブキルビー

(וְאַתָּה מְשַׁמֵּר בְּקִרְבִּי 汝は我がうちにあるそを監視する。)

ヴェ・アター・アティード・リット・ラー・ム・メフニイー

(וְאַתָּה אֵטָר לְמַלְאָךְ מִמֶּנִּי 汝はいつかそを我より取上げる。)」

全員：「バラフター・ヴェ・ヤツアルター

(אַתָּה יָצַר אַתָּה בְּרָא 創造と形成)」

P Cは、東の方向に宝瓶宮のサインを描く。

P C：「ヒー・ネイ・ニー ('נִי הֵן הֵן われはここに)

ヒー・ネイ・ニー ('נִי הֵן הֵן われはここに)

ヒー・ネイ・アーニー・ヤー ('נִי אֵנִי הֵן הֵן われはここに、神の息吹の)

アナ・ホウシーアー (אֲנִי הֵן הֵן הֵן 加護のあらんことを)」

全員：「ヤー・アナ・ホウシーアー

(אֲנִי הֵן הֵן הֵן 息吹の加護あらんこと)」

P Cはヨド・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

P C：「ヨー」 (呼気) 「へー」 (吸気) 「ベーリー・マー」 (無の性質を強く意識する。)

全員：「ヨー」 (呼気) 「へー」 (吸気) 「ベーリー・マー」 (無の性質を強く意識する。)

東の壁いっぱい、黄色い照り返しを浴びた雲海がひろがる。

雲海は下から湧きあがる雲の断片で沸騰するようだ。

その黄色い雲の渦の中心に、仄かな薄暗い陰が生まれる。

その陰は人型をつくる。人型の頭部が紫色の光を放つ。

(26) 来る (בוא) の変形 (ב') は、「霊が我がうちに入りたり (וְהָיָה בְּיָדְךָ בִּי) 」 (『エゼキエル書』 2 : 2) のように使われる。

これはエロヒムの影だ。

P Cは、祭壇の南に回り、南の方向に獅子宮のサインを描く。

P C：「アーニー・ボー (אָנִי וְעַמִּי われと名前なきもの)
アーニー・ボー (אָנִי וְעַמִּי われと名前なきもの)
エロヘイ・イスラーエル (אֱלֹהֵי יִשְׂרָאֵל 主の力よ)」

全員：「エロヘイ・イスラーエル (אֱלֹהֵי יִשְׂרָאֵל 主の力よ)」

南の壁いっぱいに、紅蓮の炎が燃えさかる。
爆発的な溶岩の噴出、燃え上がる硫黄の噴煙を炎の陰に垣間見る。
その炎の壁のただなかに、巨大なたてがみのある生き物が見える。
強靱な爪のある筋肉の束が炎を掻き分ける。
それは獅子のすがたをもつ炎である。

P Cは、祭壇の西に回り、西の方向に天蠍宮のサインを描く。

P C：「アーニー・ボー (אָנִי וְעַמִּי われと名前なきもの)
アーニー・ボー (אָנִי וְעַמִּי われと名前なきもの)
ホウシーアナ (אֲנִי וְעַמִּי われを助けよ)」

全員：「ホウシーアナ (אֲנִי וְעַמִּי われを助けよ)」

P Cはヴァウ・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

P C：「ヴァウ」(呼吸)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)
全員：「ヴァウ」(呼吸)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)

西の壁いっぱいに、ブルー・オーシャンがひろがる。
それは砂浜近くの明るい海水ではなく、海底の伺えない深海の青黒い海原である。
小島ほどもある巨大なうねりが押し寄せてくる。
その大うねりの海水の表面に、途方もなく巨大な翼ある生き物の影が映る。
それは鷲の翼のようである。

P Cは、祭壇の北に回り、北の方向に金牛宮のサインを描く。

P C：「アーニー・ボー (אָנִי וְעַמִּי われと名前なきもの)
アーニー・ボー (אָנִי וְעַמִּי われと名前なきもの)
エレッツ・カーナーニー (אֶרֶץ כְּנָעַן カナンの地よ)」

全員：「エレッツ・カーナーニー (אֶרֶץ כְּנָעַן カナンの地よ)」

北の壁いっぱいに、乾いた大地がひろがっている。
地平線の彼方には、雲をまといつかせた山脈が遠望できる。
彼方の雪の峰から手前にかけては、なだらかな丘陵地帯になっており、
その丘の上に角のある生き物の影が射す。
生き物は牡牛のように見える。

7 王の臨在

PCは、祭壇の西に回り、東面する。全員が東面する。

PCは両手を祭司の手のかたちとし、そのまま額より高く掲げる。

全員が祭司の手をつくり、両手をあげる。

PC：「6方位に王の臨在を祝福する。」

全員：「6方位に王の臨在を祝福する。」

PC：「シエム・リアション（ 第1の名前）」

PC：「上方を母音ホレムにより、祝福する。ヨォ・・・・・・・・」

ヨド（Io）を発音するとき、静かに頭部を天井に向ける。発音を続けながら静かに下ろし正面を向く。このとき上方から光が引き下ろされ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヨォ・・・・・・・・」同様に頭部を上動かす。光の動きを感じる。

PC：「北方を母音カメッツにより、祝福する。ヤァ・・・・・・・・」

ヨド（Ia）を発音するとき、静かに頭部を左に振る。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき北方から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヤァ・・・・・・・・」同様に頭部を左に動かす。光の動きを感じる。

PC：「南方を母音ツェレにより、祝福する。イエ・・・・・・・・」

ヨド（Ie）を発音するとき、静かに頭部を右に振る。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき南方から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「イエ・・・・・・・・」同様に頭部を右に動かす。光の動きを感じる。

PC：「下方を母音ヒリクにより、祝福する。イィ・・・・・・・・」

ヨド（Ii）を発音するとき、静かに頭部を下に向ける。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき下方から光が引き上げられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

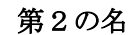
全員：「イィ・・・・・・・・」同様に頭部を下に向ける。光の動きを感じる。

PC：「東と西とを母音シュレクにより、祝福する。ユウ・・・・・・・・」

ヨド（Iu）を発音するとき、静かに頭部を前方に突き出す。発音を続けながら静かに後方へ動かし、中心より後方に押し出したのち、正しい中心に戻す。

前方（東）と後方（西）から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ユウ・・・・・・・・」同様に頭部を前後に動かす。光の動きを感じる。

PC：「シエム・シェーニ（ 第2の名前）」

PC：「上方を母音ホレムにより、祝福する。ホォ・・・・・・・・」

ヘー（Ho）を発音するとき、静かに頭部を天井に向ける。発音を続けながら静かに下ろし正面を向く。このとき上方から光が引き下ろされ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ホォ・・・・・・・・」同様に頭部を上動かす。光の動きを感じる。

PC：「北方を母音カメッツにより、祝福する。ハァ・・・・・・・・」

ヘー（Ha）を発音するとき、静かに頭部を左に振る。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき北方から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ハァ・・・・・・・・」同様に頭部を左に動かす。光の動きを感じる。

PC：「南方を母音ツェレにより、祝福する。ヘェ・・・・・・・・」

ヘー (He) を発音するとき、静かに頭部を右に振る。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき南方から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヘェ・・・・・・・・」同様に頭部を右に動かす。光の動きを感じる。

PC：「下方を母音ヒリクにより、祝福する。ヒィ・・・・・・・・」

ヘー (Hi) を発音するとき、静かに頭部を下に向ける。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき下方から光が引き上げられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヒィ・・・・・・・・」同様に頭部を下に向ける。光の動きを感じる。

PC：「東と西とを母音シュレクにより、祝福する。フゥ・・・・・・・・」

ヘー (Hu) を発音するとき、静かに頭部を前方に突き出す。発音を続けながら静かに後方へ動かし、中心より後方に押し出したのち、正しい中心に戻る。

前方（東）と後方（西）から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「フゥ・・・・・・・・」同様に頭部を前後に動かす。光の動きを感じる。

PC：「シェム・シェリシ（'ש'ל'ש'ש' 第3の名前）」

PC：「上方を母音ホレムにより、祝福する。ヴォ・・・・・・・・」

ヴァウ (Vo) を発音するとき、静かに頭部を天井に向ける。発音を続けながら静かに下ろし正面を向く。このとき上方から光が引き下ろされ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヴォ・・・・・・・・」同様に頭部を上を動かす。光の動きを感じる。

PC：「北方を母音カメッツにより、祝福する。ヴァ・・・・・・・・」

ヴァウ (Va) を発音するとき、静かに頭部を左に振る。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき北方から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヴァ・・・・・・・・」同様に頭部を左に動かす。光の動きを感じる。

PC：「南方を母音ツエレにより、祝福する。ヴェ・・・・・・・・」

ヴァウ (Ve) を発音するとき、静かに頭部を右に振る。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき南方から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヴェ・・・・・・・・」同様に頭部を右に動かす。光の動きを感じる。

PC：「下方を母音ヒリクにより、祝福する。ヴィ・・・・・・・・」

ヴァウ (Vi) を発音するとき、静かに頭部を下に向ける。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき下方から光が引き上げられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヴィ・・・・・・・・」同様に頭部を下に向ける。光の動きを感じる。

PC：「東と西とを母音シュレクにより、祝福する。ヴゥ・・・・・・・・」

ヴァウ (Vu) を発音するとき、静かに頭部を前方に突き出す。発音を続けながら静かに後方へ動かし、中心より後方に押し出したのち、正しい中心に戻る。

前方（東）と後方（西）から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヴゥ・・・・・・・・」同様に頭部を前後に動かす。光の動きを感じる。

PC：「シェム・レビユィ（'ל'ב'י'ש' 第4の名前）」

PC：「上方を母音ホレムにより、祝福する。ホォ・・・・・・・・」

ヘー (Ho) を発音するとき、静かに頭部を天井に向ける。発音を続けながら静かに下ろし正面を向く。このとき上方から光が引き下ろされ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ホォ・・・・・・・・」同様に頭部を上を動かす。光の動きを感じる。

PC：「北方を母音カメツツにより、祝福する。ハァ・・・・・・・・」

ヘー（Ha）を発音するとき、静かに頭部を左に振る。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき北方から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ハァ・・・・・・・・」同様に頭部を左に動かす。光の動きを感じる。

PC：「南方を母音ツェレにより、祝福する。ヘェ・・・・・・・・」

ヘー（He）を発音するとき、静かに頭部を右に振る。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき南方から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヘェ・・・・・・・・」同様に頭部を右に動かす。光の動きを感じる。

PC：「下方を母音ヒリクにより、祝福する。ヒィ・・・・・・・・」

ヘー（Hi）を発音するとき、静かに頭部を下に向ける。発音を続けながら静かに戻し正面を向く。このとき下方から光が引き上げられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「ヒィ・・・・・・・・」同様に頭部を下に向ける。光の動きを感じる。

PC：「東と西とを母音シュレクにより、祝福する。フゥ・・・・・・・・」

ヘー（Hu）を発音するとき、静かに頭部を前方に突き出す。発音を続けながら静かに後方へ動かし、中心より後方に押し出したのち、正しい中心に戻す。

前方（東）と後方（西）から光が引き寄せられ、正面を向いて静止した頭部に結びつけられる。

全員：「フゥ・・・・・・・・」同様に頭部を前後に動かす。光の動きを感じる。

PC：「四つの王の御名により、6方位の王の臨在が祝福された。」

PC：「祈りの声を聞かれない。偉大にして強大なる主よ。

高貴にして慈悲深き君よ、その眼差しは被造物にあまねく下される。

汝が従僕たる祈り手に向き直り、好意を持ち答えたまえ。

全宇宙の主よ、万物の造り主よ、宇宙の一者よ。

わが叫びに答え、天の門を開きたまえ。

汝が膝下にある貴顕の御名を召喚するものなり。」⁽²⁷⁾

PCが高らかに唄い始める。

PC：「リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー・シャーディー
（ לִי יְשׁוּעָה קְבוּץ שְׂדֵי 汝が導きにわが望みを主よ。）

キー・ビー・ティー・シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー
（ קְבוּץ שְׂדֵי לִי יְשׁוּעָה 我が望みを主の導かれるままに。）

シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー
（ לִי יְשׁוּעָה קְבוּץ 主の導きに我が望みを。）」

PC：「サティームー・ヴェ・グー・リアー（ סַתִּימוּ וְגוּ לִי ）」

全員：「隠され開示されたり。」

聖化した四方位の風に取り巻かれ、王の臨在のもと、春分の秘儀にあずかる。

PCは、神殿の北に行き、南を向いて言う。

(27) James R. Davila, *Descenders to the Chariot*, Boston : Brill, 2001, p.113.

「この場は、光と闇の至聖処なり。
今、頭上に春分の太陽があり、
光は闇と均衡せんとしている。
われは律法の宰相として、
春分の執行を宣言する。」

8 春分の主祭

PCは、神殿の東側から中央を向いて言う。

PC：「祭壇に宇宙の軸を召喚せん。
I a H a V a H a (ヤアー・ハアー・ヴァー・ハアー)
H e V e H e I e (ヘイ・ヴェイ・ヘイ・イエイ)
V o H o I o H o (ヴォー・ホー・イヨー・ホー)
H I H V (ヘー・ヨド・ヘー・ヴァウ)」

PCが宣言する。

PC：「大いなる周行をもって、祭壇に集中せん。」

祭壇を軸として、3度周行する。

PC：「神秘なる周行は完成し、昼と夜は均衡した。春分は到来せり。」

PCは、祭壇の東に立ち、西に向かってハーポクラテスのサインを行う。

PC：「深き闇に拝礼す。光は闇より生まれたり。神殿の古きパスワードは・・・なり。」

PCは、祭壇の西に廻り、東に向かってホルスのサインを行う。

PC：「全き光に拝礼す。闇は光に内在せり。神殿の新しきパスワードは・・・なり。」

PC：「パスワードは交換された。」

全員が祭壇を取り囲む。

PC：「腕を組み、手と手を取りて、われらのオーラをひとつに融け合わせよう。
無敵なる主の顕現にあずかりて、われらの靈魂をひとつとなし、
そをもちて、この神殿は栄光の場とならん。」

全員が手を組み輪のなかに祭壇を包み込む。

手を放すことなく次を唱える。

全員：「主よ。われらは自らを捧げん。
わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。
汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

全員、東を向く。

全員：「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！
光と闇の主よ。」

9 諸天使の出立

P Cは祭壇の北に行き、南を向く。

P C：「律法の宰相の加護に感謝する。
霊の虚の場所に戻りたまえ。」

P Cは再度、祭壇の西に行き、東を向く。

P C：「聖なる五つの文字に表象される長老たちよ。
ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー (דוד שין וואו ה))
万軍の将、霊の虚の場所に住まわん。
ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー (דוד שין וואו ה))
戴冠せる王、霊の虚の場所に住まわん。
光と闇の轆轤を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

P C：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。
主の聖霊は、森羅万象の上にあり、下にあり、内にあり、外にもある。
主よ、生ける霊と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。
律法の宰相は、肉の衣を去れり。」

全員：「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

10 地上への帰還

P C：「人の子らよ。律法の宰相は、去れり。されば、地上に帰還せん。」

P Cは《ヴェールを閉じる》サインを行う。

P C：「イエヘシュアーとイエホバシャーの御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

P C：「われは宣言する。神殿作業は終了せり。」

全員：「神殿作業は終了せり。アーメン。」

神殿の外へ出る。神殿の外庭でウシャブティを解放し、光の洞窟を通過して光体は自分の部屋に戻る。静かに肉体に戻る。四肢の感覚が戻ったところで、光の法衣を脱ぐ。（特別な手順は必要ない。）光の法衣とともに儀式中に刻印された封印、その他の印は精妙界に去る。

その後、静かに目を開き、立ち上がる。

法衣を着用している場合は、沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ（『魔法日記』用）を終わるまで、この沈黙を続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORUM PUBLICA
I : O : S :
RITUALE DE
AEQUINOCTIO VERO XA

IMPRIMI POTEST: I : O : S :
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M. E. S. A. 5=6
MARTIUS MCMXCXX

春分儀式 VE 1 0 A

Copyrights © All rights reserved I : O : S : 2010

2010年3月15日 I : O : S : 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I : O : S : の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I : O : S : の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。

表紙図版：アブラフィア『来るべき世界での生』に掲示された文字円